

授業概要

アメリカ文学史における小説を中心として、時代順にアメリカの成立から、同時多発テロ以後におけるまで、アメリカ文学の流れを巨視的に概観してゆく。重要な作家の作品の抜粋などを精読し、また映画化作品のワン・シーンを見ることで理解の助けとして、テーマや文学史上の意義を考える。現代のアメリカ像が浮かび上がってくるような文学史を目指すことで、文学にたいする概念が変化する入門を目標としたい。

授業計画

第1回	アメリカの誕生—その歴史と文化
第2回	アメリカ文学とは何か—コロンブスとインディアン
第3回	文学としてのインディアン捕囚体験記—ポカホンタスの物語
第4回	小説の誕生(1)—ワシントン・アービング、女流作家たち
第5回	ゴシック小説の誕生—C・B・ブラウン
第6回	エドガー・アラン・ポー—「群衆の人」「マリーロジェの謎」
第7回	ナサニエル・ホーソーン—『緋文字』
第8回	ハーマン・メルヴィル—『白鯨』
第9回	アメリカ文学における黒人—『アंकルトムの小屋』『ハックルベリフィンの冒険』
第10回	小説の洗練—ヘンリー・ジェイムズ
第11回	リアリズムと自然主義文学—ジャック・ロンドンとフランク・ノリス
第12回	ジャズエイジの文学—フィッツジェラルド『グレート・ギャッピー』
第13回	大衆小説の黄金時代—エドガー・ライス・バロウズ、H・P・ラヴクラフト
第14回	ノーベル賞とアメリカ文学—アーネスト・ヘミングウェイとジョン・スタインベック
第15回	現代文学—SF文学 新たな文学のゆくえ
第16回	定期試験

到達目標

アメリカ文学における重要な作家の作品の一部を読み、文学史を概観することによって、アメリカという国家の特質を考える。現代文化における文学の重要性を再発見すると共に、自発的に読書する習慣が身につくように、文学の楽しさを味合えるような「教養的」な学力の養成を目指す。

履修上の注意

言うまでもなく授業中の私語、睡眠は許されない。マナーを尊重して楽しい授業にしてゆきたいので、積極的な参加を望みたい。大量の資料を配布するのでファイルを持参のこと。

予習・復習

配布した資料は事前に予習として必ず読み、授業後に再び読み直してほしい。

評価方法

学期末試験（60%）、コメントペーパー（40%）などの総合評価。

テキスト

授業中に資料を配布する。

授業概要

イギリス文学の発展を、詩歌・物語詩、演劇、小説というジャンルの変遷とともに紹介する。現存する最古の英詩とされる8世紀頃の英雄譚『ベオウルフ』に始まり、14世紀のサイクル劇やチャーサーの『カンタベリ物語』を経て、16世紀エリザベス朝のシェイクスピアに代表される演劇作品、そして『ロビンソン・クルーソー』や『ガリバー旅行記』など散文による小説が大衆のものとなって行く18世紀までを、作品に触れながら解説する。文学を産み出す自然環境、歴史、文化、宗教、経済や科学技術の発展などにも考察を加える。人間のみが持つ高度な「ことば」を用いて築き上げてきた文化の中心にある「文学」の存在意義を再確認するように指導する。

授業計画

第1回	イントロダクション イギリスの歴史区分と文学ジャンルの展開
第2回	古英語の時代： 英雄叙事詩『ベオウルフ』 自然、北欧神話、キリスト教
第3回	中英語の時代： 演劇の発展
第4回	中英語の時代： 中世英国サイクル劇と道徳劇
第5回	中英語の時代： ノルマン・コンクエストと英語の発展
第6回	中英語の時代： ジェフリー・チャーサーとイタリア・ルネサンス
第7回	中英語の時代： ジェフリー・チャーサー 『カンタベリ物語』が描く民衆の姿
第8回	中英語の時代： 印刷術の発展とアーサー王伝説
第9回	中英語の時代： 『アーサー王の死』『ガウェイン卿と緑の騎士』
第10回	エリザベス朝： イギリス・ルネサンスと演劇の発展
第11回	エリザベス朝： シェイクスピアの四大悲劇（1） 『ハムレット』『リア王』
第12回	エリザベス朝： シェイクスピアの四大悲劇（2） 『マクベス』『オセロ』
第13回	小説の誕生： 市民社会の発展 『ロビンソン・クルーソー』
第14回	小説の誕生： 市民思想の発展 『ガリバー旅行記』
第15回	まとめ
第16回	筆記試験

到達目標

イギリス文学の発展の経緯を理解し、それを生み出した自然環境、歴史、文化、宗教などとのつながりを理解する。

教養人として知っておくべき（本来は読んでおくべき）重要な文学作品についての理解を持つ。

履修上の注意

講義科目ではあるが、文学作品の読み方を身につけ、自分で読むことに結びつけるという意味では、実習科目である。座って板書を書き写していればよいというものではない。これまで見たことも聞いたこともない文学作品との出会いに積極的に取り組む姿勢が必要である。翻訳が入手可能な作品は実際に読むことが望ましい。

遅刻は受講態度においてマイナスとなる。

予習・復習

毎回教材を配布するので、あらかじめ読んでおくことが予習であり、授業後に学んだことを基にして読み返すことが復習である。適宜レビューを実施して、予習と復習の有無を確認する。

評価方法

予習復習の程度、授業への参加度、随時課すレポートあるいはレビューを受講態度として点数化し、筆記による定期試験の結果と合わせて評価する。定期試験は持ち込み不可で行う。

学期末試験 70% 受講態度 30%

テキスト

テキストは用いない。教材を配布する。